モンゴル

住民参加型地方学校建設プロジェクト

巡回指導調査団　報告書

JICA LIBRARY
1209182 [3]

平成 **14** 年 **11** 月

国際協力事業団

青年海外協力隊事務局

青海二
JR
02-16

1209182 [3]

序文

モンゴル国への隊員派遣は 1992 年 4 月に開始され、今年で 11 年目となる。開始以来、これまで約 140 名の隊員を派遣してきた。

モンゴル国の教育システムは社会主義時代に確立し、80 年代には政府予算の 80%が割かれる重点項目として、識字率 97%という教育水準を達成するなど比較的安定していたが、市場経済化以降、教育予算の削減等を背景に、教育施設の老朽化、教員待遇の悪化等様々な問題が顕在化することとなった。このような現状に関し、国際社会からの支援が求められており、モンゴル事務所は、基礎教育施設改善プログラムを策定した。本プログラムは、初等教育分野において、市場経済化による社会体制の混乱により老朽化が進んでいる教育施設にかかる改修・整備にかかる協力支援を行うものである。地方学校建設プロジェクトは、このプログラムの第一段階に位置づけられ、学校改修・建設工事のモデル作りを目標としたモンゴル初のグループ派遣であり、住民参加型手法により、低コストで且つ継続的な校舎改修・建設の実現を目指している。

本調査団は、本調査団は、本グループ派遣活動の現状と問題点を把握するとともに、今後の活動方針について関係者と協議し、事務局としての支援体制に反映することを目的として派遣された。

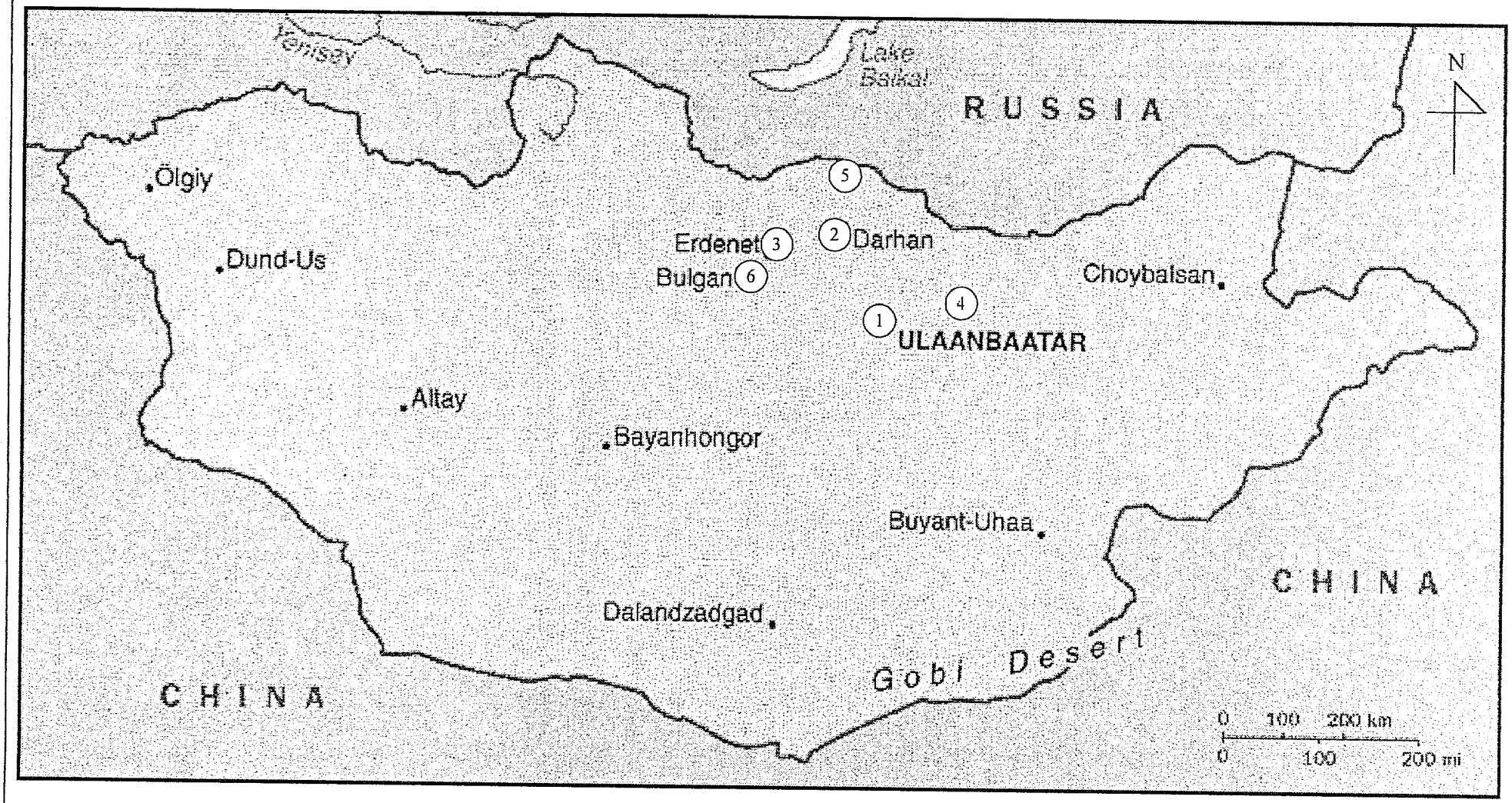
本報告書は、同調査団による調査結果を取りまとめたものであり、今後の同職種の活動及び同種のグループ派遣活動に広く活用されることを願うものである。

ここに、今回の調査に協力いただいた関係者の方々に対し、深く謝意を表するとともに、引き続き一層のご支援をお願いする次第である。

平成 14 年 11 月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
局長　金子　洋三

モンゴル国　ボランティア配置図　　平成１４年１１月１日現在



モンゴル国　ボランティア派遣情報一覧

平成14年11月1日現在

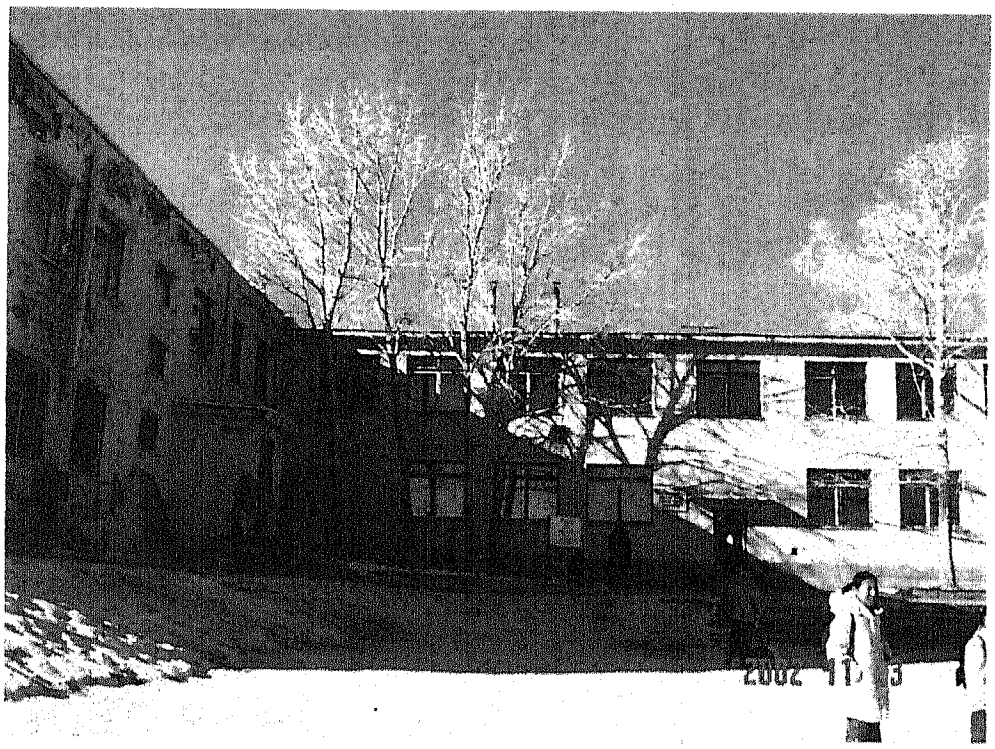
任地番号	No.	隊次	隊員氏名	性別	隊員氏名（英）	職種／指導科目	派遣期間~	~派遣期間	任地	配属先省庁	活動先
1	1	12-2	林　君彦	Mr.	Kimihiko HAYASHI	デザイン	2000.12.8	2002.12.7	ウランバートル市	教育文化科学省	文化芸術大学付属文化大学
	2	12-2	大澤　優子	Ms.	Yuko OSAWA	日本語教師	2000.12.8	2002.12.7	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	3	12-2	大坪　幸子	Ms.	Sachiko OTSUBO	幼稚園教諭	2000.12.8	2002.12.7	ウランバートル市	教育文化科学省	ウランバートル市教育センター
	4	12-2	清水　広美	Ms.	Hiromi SHIMIZU	婦人子供服	2000.12.8	2002.12.7	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	5	12-2	橋本　知佳	Ms.	Chika HASHIMOTO	日本語教師	2000.12.8	2002.12.7	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	6	12-3	大津　和範	Mr.	Kazunori OTSU	バレーボール	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市	オリンピック委員会	バレーボール協会
	7	12-3	小桐　聡子	Ms.	Satoko OGIRI	縫製	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市	教育文化科学省	ウランバートル市第９７中学校
	8	12-3	北須賀　淑絵	Ms.	Yoshie KITASUKA	診療放射線技師	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市	保健省	国立第２病院
	9	12-3	田中　晶子	Ms.	Akiko TANAKA	建築	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	10	12-3	遠田　美穂	Ms.	Miho TOHDA	幼稚園教諭	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市	教育文化科学省	第１４幼稚園
	11	13-1	浦　真由美	Ms.	Mayumi URA	養護	2001.7.13	2003.7.12	ウランバートル市	教育文化科学省	第１０治療保育園
	12	13-1	佐藤　育美	Ms.	Ikumi SATO	看護師	2001.7.13	2003.7.12	ウランバートル市	保健省	国立第２病院
	13	13-2	古賀　恵子	Ms.	Keiko KOGA	陶磁器	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	教育文化科学省	文化芸術大学付属造形芸術学校
	14	13-3	安藤　弘晃	Mr.	Hiroaki ANDO	体操競技	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	オリンピック委員会	体操協会
	15	13-3	萩生田　康治	Mr.	Yasuharu HAGIUDA	青少年活動	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	ハンウール区役所	ハンウール区役所
	16	13-3	前川　哲平	Mr.	Teppei MAEKAWA	合気道	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	オリンピック委員会	合気道協会
	17	13-3	吉田　将彦	Mr.	Masahiko YOSHIDA	テニス	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	オリンピック委員会	テニス協会
	18	13-3	小椋　範子	Ms.	Noriko OGURA	美容師	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	教育文化科学省	工業美術学校
	19	13-3	工　綾子	Ms.	Ayako TAKUMI	看護師	2002.4.5	2004.4.4	ウランバートル市	保健省	国立第３病院
	20	14-1	小林　利秋	Mr.	Toshiaki KOBAYASHI	電話交換機	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	21	14-1	松尾　隆之	Mr.	Takayuki MATSUO	コンピュータ技術	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	22	14-1	堀田　篤	Mr.	Atsushi HOTTA	柔道	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	オリンピック委員会	柔道協会
	23	14-1	中村　功	Mr.	Ko NAKAMURA	建築	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	教育文化科学省	教育文化科学省（地方学校建設Ｐ）
	24	14-1	山田　ゆかり	Ms.	Yukari YAMADA	エアロビクス	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	オリンピック委員会	体操協会
	25	14-1	甲山　敏恵	Ms.	Toshie KOYAMA	日本語教師	2002.7.20	2004.7.20	ウランバートル市	教育文化科学省	第１８中学校
	26	14-1	仲西　真由美	Ms.	Mayumi NAKANISHI	建築	2002.8.17	2004.7.20	ウランバートル市	教育文化科学省	教育文化科学省（地方学校建設Ｐ）
	27	H14度一般短期	板橋　貴子	Ms.	Takako ITABASHI	日本語教師	2002.8.23	2004.1.6	ウランバートル市	教育文化科学省	第２３中学校
	28	H13度シニア	磯野　哲郎	Mr.	Tetsuo ISONO	建築	2002.2.20	2004.2.19	ウランバートル市	教育文化科学省	教育文化科学省（地方学校建設Ｐ）
	29	H13度シニア	近藤　智則	Mr.	Tomonori KONDO	プログラムオフィサー	2002.2.8	2003.1.31	ウランバートル市	教育文化科学省	教育文化科学省（地方学校建設Ｐ）
	30	SV	川辺　正人	Mr.	Masato KAWABE	ピアノ調律	2000.11.17	2002.11.16	ウランバートル市	教育文化科学省	教育文化科学省文化芸術局
	31	SV	佐藤　武久	Mr.	Takehisa SATO	情報工学	2001.11.16	2003.11.15	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	32	SV	元山　芳彰	Mr.	Yoshiaki MOTOYAMA	経営管理	2001.11.16	2003.11.15	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	33	SV	米澤　勝	Mr.	Tsutomu YONEZAWA	化学	2001.11.16	2002.11.16	ウランバートル市	教育文化科学省	国立科学技術大学
	34	SV	渡部　真人	Mr.	Mahito WATABE	古生物学	2001.11.16	2002.11.16	ウランバートル市	教育文化科学省	古生物学センター
	35	SV	植田　正紀	Mr.	Masanori UEDA	工業規格	2002.3.22	2003.3.22	ウランバートル市	通産省	国立品質標準センター
	36	SV	杉井　しげ子	Ms.	Shigeko SUGII	点字	2002.3.22	2003.3.22	ウランバートル市	教育文化科学省	第２９養護学校
2	37	12-2	泊　直美	Ms.	Naomi TOMARI	歯科技工士	2000.12.8	2002.12.7	ダルハンウール県ダルハン	ダルハンウール県庁	社会福祉サービスセンター
	38	12-2	山下　和美	Ms.	Kazumi YAMASHITA	保育士	2000.12.8	2002.12.7	ダルハンウール県ダルハン	ダルハンウール県庁	ダルハンウール県治療保育園
	39	12-3	舩木　恵子	Ms.	Keiko FUNAKI	臨床検査技師	2001.4.6	2003.4.5	ダルハンウール県ダルハン	ダルハンウール県庁	ダルハン総合病院
	40	13-3	杉村　亜泉	Ms.	Azumi SUGIMURA	幼稚園教諭	2002.4.5	2004.4.4	ダルハンウール県ダルハン	ダルハンウール県庁	ダルハン第４幼稚園
	41	14-1	亀田　春雄	Mr.	Haruo KAMEDA	日本語教師	2002.7.20	2004.7.20	ダルハンウール県ダルハン	ダルハンウール県庁	オユーニーイレードゥイ総合学校
3	42	12-2	亀山　明生	Mr.	Akio KAMEYAMA	バトミントン	2000.12.8	2002.12.7	オルホン県エルデネット	オルホン県庁	オルホン県スポーツ委員会
	43	13-1	菊池　芳恵	Ms.	Yoshie KIKUCHI	小学校教諭	2001.7.13	2003.7.12	オルホン県エルデネット	オルホン県庁	オルホン県第１０小学校
	44	13-1	藤原　朋子	Ms.	Tomoko FUJIWARA	家政	2001.7.13	2003.7.12	オルホン県エルデネット	オルホン県庁	オルホン県第５中学校
	45	13-3	橋本　勉	Mr.	Tsutomu HASHIMOTO	バレーボール	2002.4.5	2004.4.4	オルホン県エルデネット	オルホン県庁	オルホン県スポーツ委員会
4	46	12-3	高松　秀樹	Mr.	Hideki TAKAMATSU	バレーボール	2001.4.6	2003.4.5	ウランバートル市バガノール区	バガノール区役所	バガノール地区教育開発センター
5	47	13-1	久本　千絵	Ms.	Chie HISAMOTO	食品衛生	2001.7.13	2003.7.12	セレンゲ県スフバートル	セレンゲ県庁	セレンゲ県品質標準センター
6	48	13-2	松坂　謙太郎	Mr.	Kentaro MATSUSAKA	コンピューター技術	2001.12.7	2003.12.6	ボルガン県ボルガン	ボルガン県庁	ボルガン県庁
	49	14-1	三浦　恵美	Ms.	Emi MIURA	幼稚園教諭	2002.7.20	2004.7.20	ボルガン県ボルガン	ボルガン県庁	ボルガン第１幼稚園

派遣期間の定義は「本邦出発日から本邦帰国日までの期間」であるが、平成14年4月10日以前に出発した青年海外協力隊員については、当該欄に「本邦出発日から任国出発前日までの期間」を記入している。これは決裁（青）第3-25033号（平成14年3月25日付）により、活動期間の定義が変更されたことに伴うものである。

アイラグ学校工事現場（外観）

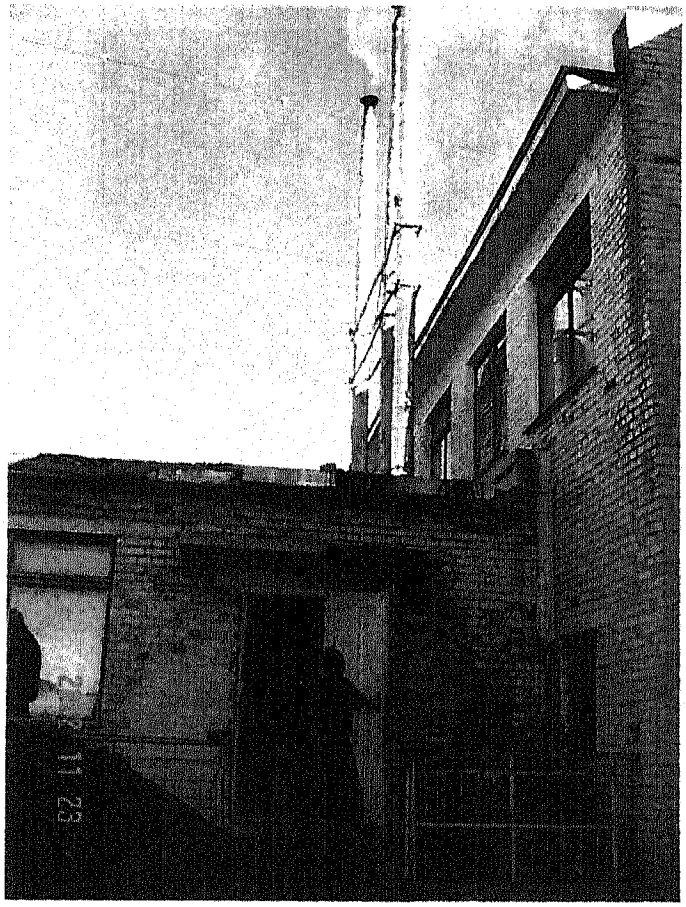
アイラグ学校工事現場（内部）
（左が仲西隊員、中心が西村団員）

アイラグソム SMC との協議（アイラグソム役場にて）

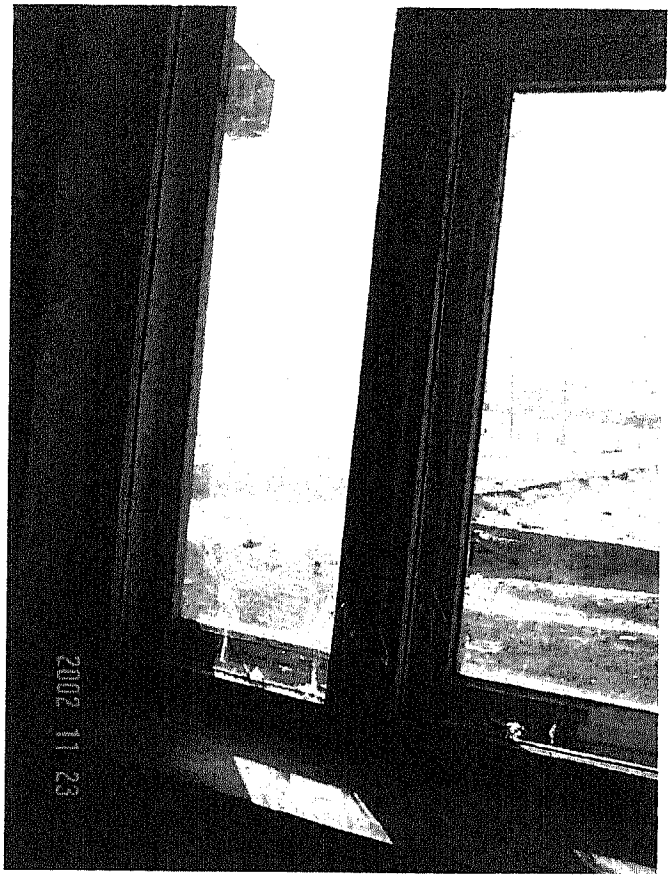


エルデネサント学校

エルデネサント学校に立てられた看板



エルデネサント学校の
ボイラー室と煙突



エルデネサント学校に
取り付けられた二重窓

エルデネサントソム SMC との協議

目次

第一章　巡回指導調査団の派遣
1-1　調査の経緯と目的……1
1-2　調査団の構成……1
1-3　調査日程……2
1-4　主要面談者……2

第二章　調査結果
2-1　プロジェクトチームの活動の進捗状況……4
2-2　協力対象学校視察結果……4
2-3　モンゴル教育省表敬訪問……5

第三章　総括
3-1　プロジェクトの問題点と課題……6
3-2　今後の方向性……6

付属資料

1. プログラム協力総括票
2. 技術指導団員報告
3. 教育省との協議結果
4. アイラグソム SMC との協議結果
5. エルデネサントソム SMC との協議結果

第一章　巡回指導調査団の派遣

1-1　調査団派遣の経緯と目的

現在、実施中のモンゴル初のグループ派遣は、地方学校校舎の老朽化と校舎数の不足が問題となっているモンゴル国において、隊員の投入により、地方学校の建築・改修のモデルを提示し、低コストで且つ継続的な校舎改修・建設の実現を目的とするものである。今後、モンゴル側とミニッツを締結し、チーム派遣「住民参加型地方学校建設プロジェクト」に移行させる予定である。

2002 年 2 月にシニア隊員 2 名（建築・プログラムオフィサー）を派遣、14 年度 1 次隊にて一般隊員 2 名（建築）も派遣され、現在、モンゴル側と協議を重ねながらプロジェクトの計画立案に取り組んでいる。

プロジェクトは、最終的には、住民参加型方式にて、ソム（地方自治体）と学校が主体となった学校施設の修復と維持管理能力の強化を進め、地域社会が、学校施設の修復と維持管理計画の策定、修復工事の実施と管理、メンテナンスまで一貫して行えるようになることで、持続的な学習環境の改善を目的としている。現状として、今年度は草の根無償を資金源として現地の建設業者を活用した学校修復の支援を実施することとし、来年度以降、住民参加型方式へ移行させることを念頭に置いた将来の活動計画を順次検討することとしている。

本調査団は、以下事項を目的として派遣された。

(1) 現地を訪問し、計画の現状と問題点を把握する。

(2) (1)に加え、協力対象校の工事現場視察を通してモンゴルの建設業者の技術レベルを把握し、今後の事務局としての支援体制に反映させる。

(3) (1)(2)を踏まえ、事務所及びプロジェクトと、今後のプロジェクトの枠組み及びプロジェクト立ち上げまでの活動方針について協議する。

1-2　調査団の構成

担当分野	氏名	所属
団長/総括	伊藤　耕三	JICA 青年海外協力隊事務局　海外第二課　課長代理
技術指導	西村　忍	JICA 青年海外協力隊事務局　技術顧問
業務調整	三津間由佳	JICA 青年海外協力隊事務局　海外第二課　職員

1-3　調査日程

日付	曜日	内容
11 月 18 日	月	成田-ウランバートル(OM502)
11 月 19 日	火	日本大使館表敬 JICA 事務所表敬・協議 教育文化科学省表敬 プロジェクトチームとの協議
11 月 20 日	水	ウランバートルーアイラグソムへ移動（車） 関係者打合せ
11 月 21 日	木	アイラグソム学校管理委員会（SMC）との協議 アイラグ学校視察 関係者打合せ アイラグソム出発（汽車）
11 月 22 日	金	ウランバートル着(汽車) JICA 事務所報告 日本大使館報告
11 月 23 日	土	ウランバートルーエルデネサントソムへ移動（車） エルデネサント学校視察 エルデネサントソムーウランバートルへ移動（車）
11 月 24 日	日	モンゴル隊員 5 名との面談 一般建設現場視察 無償資金協力学校視察
11 月 25 日	月	ウランバートルー成田（OM501）

1-4　主要面談者

モンゴル側

教育文化科学省：

Baatar ERDENESUREN, Deputy-Minister

Begziav MUNKHBAATAR, Deputy Director of Public Administration and International Cooperation Department

GANSUKH Purevjav, Assoc.Prof. Director, Economic-Monitoring and Evaluation Department

アイラグ学校管理委員会（SMC）：

ガルサンシェレン（ソム長）、ジャルガル（アイラグ学校校長）他

エルデネサント学校管理委員会（SMC）：

ムンフバット（エルデネサント学校校長）他

日本側

在モンゴル日本国大使館：

当田　達夫	大使
染谷　一弘	二等書記官

JICA モンゴル事務所：

平井　敏雄	所長
清水　暁	所員
山田　暁	所員
麻野　英二	協力隊調整員

プロジェクトチーム：

磯野　哲朗	シニア隊員（建築／リーダー）
近藤　智則	シニア隊員（プログラムオフィサー）
中村　功	隊員(14 年度 1 次隊・建築)
仲西　真由美	隊員(14 年度 1 次隊・建築)

第二章　調査結果

2-1　プロジェクトチームの活動の進捗状況

アイラグソム、エルデネサントソムの 2 箇所において、草の根無償資金協力を活用し、モンゴル現地業者と学校管理委員会（SMC）の間で 10 月初旬に改修工事の契約を行った。現在、アイラグには仲西隊員、エルデネサントには中村隊員が常駐する形で工事の施工管理へのアドバイスを行っている。また、磯野シニア、近藤シニアはウランバートルのオフィスでの業務のほか、出張ベースでソムでのモニタリングを実施している。アイラグは来月に改修工事が終了予定、エルデネサントは今月中には暖房工事・窓の修理がほぼ終了する予定である。

2-2　協力対象学校視察結果

2-2-1 アイラグ学校

仲西隊員が常駐して工事の施工管理への助言を行っている。

調査団は、11 月 21 日にアイラグソムのソム長を表敬後、学校管理委員会（SMC）メンバーとの協議を行った。協議では、SMC が屋根・暖房設備・電気配線等各分野の工事の責任者を決め、業者を使い、住民を組織しながら工事を実施していることが確認された。協議結果は別添資料の通り。

アイラグ学校の工事現場では、資機材の到着遅れによる暖房工事の遅れ等から全体のスケジュールに遅れが出ているものの、隊員と SMC 及び参加住民との良好な関係が築かれ、住民も精力的に工事に当たっており、技術的にも特に問題はないことが確認された。しかし、契約時の見積もり金額と実際の工事の実情が乖離している現状があるため、中間段階での見積の見直し作業を実施することが必要である。

なお、アイラグソムは鉄道と鉱山が主要産業の職工の町であり、住民の中に専門職の人材が多い。学校改修工事にも各分野の専門技術を持つ住民が配置されており、技術的・品質的に予想以上の成果が上がっている。しかし、アイラグソムでのこのような状況は例外的であり、本事例をモデルとする場合、今後他のソムでの学校改修工事に応用可能か否かは、別途検討が必要である。

2-2-2 エルデネサント学校

中村隊員が常駐しているほか、近藤シニアが出張ベースで工事の施工管理への助言を行っている。

調査団は、11 月 23 日にエルデネサント学校校長を表敬後、学校管理委員会(SMC)メンバーとの協議を行った。協議では、SMC と参加住民の良好な関係が

築かれ、冬季の工事中断期間に入る前の窓・暖房工事はほぼ予定通り終了する見込みであることが確認された。来春に残りの工事を再開する予定である。

また、住民参加を強く意識し、ソムが住民に広く呼びかける形で SMC メンバーを募り、工事に参加する住民を選定したことには、ソムの主体性が感じられた。協議結果は別添資料の通り。

両校とも、草の根無償資金協力の申請・締結時期の関係で工事の着工が 10 月後半となったため、モンゴルの厳寒の気候の中で夜遅くまで工事をしている状況である。今後は工事の実施時期につき、モンゴルの気候を十分考慮した上で設定する必要がある。

2-3　モンゴル教育省表敬訪問

調査団は、11 月 19 日に教育省副大臣を表敬した。教育省からは、日本の協力への感謝の意が表明されたほか、来年以降の工事資金の懸念が表明された。調査団からは、学校建設のモデルをドナーに提示し、資金確保の一助とするよう提言した。プロジェクト枠組みの明確化の上では、CCU(学校建設ユニット)のプロジェクトへの主体的参加を強く教育省側に申し入れていく必要性が感じられた。

協議結果は別添資料の通り。

なお、本調査終了後のプロジェクトチームと事務所の打ち合わせにて、プロジェクトのリーダーが教育省にもデスクを持ち、教育省との調整を実施していく体制とする方針である旨報告があった。

第三章　総括

3-1　プロジェクトの問題点と課題

本プロジェクトは計画策定の段階から地域住民が学校管理委員会／School Management Committee（SMC）として参画して学校改修・新築を行い、その後の維持管理を含めたモデルを提示することを目標としている。

実験的なプロジェクトであるが、準備期間の不足、モンゴルの過酷な気候環境等から、協力計画の全体像が未確定のうちに開始されており、プロジェクト関係者の混乱の一因となっている。調査団は、今回の調査を踏まえて以下の課題を提示した。

(1) プロジェクトの枠組み（プロジェクトの上位目標、プロジェクト目標、成果、活動等）が未定であるため、プログラム全体の目標の中の本プロジェクトの位置づけについて関係者間が同様の認識を持った上で、本プロジェクトの枠組みについて協議の上、早期に確定していく必要がある。

(2) (1)に関連し、住民参加型手法を今後取り入れていくのであれば、「住民参加」の中身について、関係者間でのさらなる検討が必要である。

(3) ソムでの活動が中心となっていることもあり、プロジェクトチーム内での報告・連絡体制が確立されていないため、定期的な打合せの場を確保するよう改善する必要がある。

(4)工事への着工の遅れや、資材の到着の遅れ等から、アイラグでの工事は来月までかかる見込みであり、厳寒の環境の中で工事の是非につき検討が必要である。また、契約時の見積もり金額と実際の工事の実情が乖離している現状があるため、中間段階での見積の見直し作業を実施することが必要である。

3-2　今後の方向性

3-2-1　プロジェクトの枠組みの策定

関係者との協議においては本プロジェクトの上位目標、目標及び成果について概ね認識が共有されていたが、協力範囲の重点項目については関係者間で理解が異なっている。JICA モンゴル事務所は本プロジェクトを基礎教育施設改善プログラムの初期段階の一部ととらえていることから、今後、プロジェクトチーム内だけでの議論ではなく、事務所主導による協力枠組みの策定が早急に必要である。

今年度実施している 2 校の工事については、プロジェクトの枠組みが未確定であることや、モンゴル側の体制が未整備であったことにより、業者を使っての改修工事となった。来年度、新たにモデル校を選定して工事を実施する場合は、1 校に協力対象を絞り、技術面においても業者に任せるのではなく、プロ

ジェクトチームが最初の段階から関わり、改修工事モデル提示のためのプロセスを蓄積していくのが望ましいとの見解が事務所より示された。

3-2-2　プロジェクト実施体制

現在は、プロジェクトチーム内での報告・連絡体制が確立されておらず、プロジェクト実施・運営体制の不備が明らかとなった。これには、プロジェクトチーム４名のうち、２名の一般隊員はアイラグ・エルデネサントの両ソムでの活動が中心であり、ソムからの通信手段が整っていないことも一因といえる。

そのため、各隊員の役割分担を明確化し、チーム内において、チーム全体の目標及び各隊員が担当している業務の進捗について情報を共有できるよう、体制を見直すとともに、定期的な打合せの場を確保するよう改善する必要がある。

現在進行中の改修工事自体は、さまざまな問題に直面しながらも、隊員の努力により進捗しているが、工事自体の完了が目的ではなく、そこから得られる知見・経験をもとに再現可能なモデルを提案することが目的であることから、モニタリングすべき項目を明らかにし、はっきりとした目的意識と計画性を持って対処していくべきである。

調査団からは、上記に関し、事務所及び事務局にて進捗モニタリングを行うため、現有の四半期報告ではなく、週例報告書（今週の活動内容及び達成事項及び次週の活動予定を簡潔にまとめたもの）を提出することをプロジェクトチームに申し入れた。

また、今後は、プロジェクトチーム内のみならず、JICA モンゴル事務所も交えて協議を行い、意思決定していくこととするよう併せて申し入れた。

付属資料

1. プログラム協力総括票
2. 技術指導団員報告
3. 教育省との協議結果
4. アイラグソム SMC との協議結果
5. エルデネサントソム SMC との協議結果

協力プログラム総括票1

I. 基本情報

国　名	モンゴル	プログラム番号	0450070
区　分	○新規 ◉継続 ○再要請	関連公信番号	
援助重点分野	基礎生活支援		
開発課題	教育行政、教員研修制度、理科教育		
協力プログラム名称	(和) 基礎教育行政支援プログラム (外)		

II. 概要

援助重点分野及び開発課題の概要等（協力プログラムの背景）

「モ」国の教育システムは社会主義時代に確立し、80年代には政府予算の約25%が割かれる重点ｾｸﾀｰとして、識字率97%という教育水準を達成するなど比較的安定していたが、市場経済化以降、教育予算の削減（15%まで低下）等を背景に、各種教育指標の悪化、教育施設老朽化、教員待遇悪化など様々な問題が顕在化することとなった。これに対し、モ教育省は国際機関等の提言を受け、教育セクターにおける合理化、効率化を進めているほか、就学年令の引き下げ、教育年限の延長等大胆な教育改革に取り組む姿勢を見せている。

これら施策は高等教育ｾｸﾀｰで進学率増加が図られるなど一部改善も見られるが、引き続き厳しい教育予算状況から、独自での施設改修が困難な他、市場経済化後の都市への人口流入、地域間格差増大等の社会状況変化への教育ｼｽﾃﾑの対応（都市部学校適正配置、地方教員数確保及び資質の向上、IT等市場経済化に即したｶﾘｷｭﾗﾑ作成等）が課題となっており、国際社会からの支援が求められている。

尚、高等教育分野については、他の国際機関やNGO、また我が国のJOCVや90年代より支援が行われてきたが、基礎教育分野への支援は、ODAベースでの首都圏や地方中核都市でのハード面支援や市民団体及び学校間の草の根交流等により散発的に行われてきたものの、基礎教育セクターの凡そ8割りを占める地方学校及び関係機関への支援については、遠隔性や協力対象の多さ等から地方展開を含めた体系的な支援はなされておらず、ADB等国際ドナー間においても課題とされている。

協力プログラムの目的と各プロジェクト・個別案件の位置付け

＜協力プログラムの目的＞

教育開発計画・活動計画の作成・実施に係る助言を行うことによりモ側が進める教育計画策定・実施体制強化（教育行政分野キャパシティビルディング強化）に資することを目的とする。

＜投入・活動計画＞

・個別案件「教育行政アドバイザー」；教育行政、学校運営など分野横断的課題への助言。セクター総括・案件調整
・個別案件「教育IT」；教育分野におけるITリテラシーの向上（Sakuraプロジェクト）
・個別案件「教員再訓練」「教育カリキュラム開発」；現状及び課題把握と協力プランの策定
・国特研修「教育行政」；主として地方を対象にした基礎教育計画策定及び教員研修計画策定を目的とした本邦研修
・海外ボランティア；日本語教師、各種技術分野、理科教師、環境教育等

目標年次までに期待される具体的成果　※可能な限り数値化することが望ましい

・モンゴル国における教育分野開発課題の整理（2001年度目処。必要に応じ継続ﾁｪｯｸ）
（モ教育省と協力し、モ側調査内容、日本側調査内容（教育プロ形、専門家派遣）及び各ドナー調査等を整理・統合し、教育政策立案に利用可能な資料として取り纏める）

↓

・日本政府による教育分野対モ協力活動方針の作成（2002年度中。数年毎見直し要）
（上記整理された課題を元に、我が国協力内容に係る詳細計画の策定及び実施調整）

↓

・モ国教育行政分野における日モパートナーシップ体制構築
（上記活動を基に教育行政分野に係る助言指導を行う。数値化しにくいが施策への反映度が評価点か）

目標年次	2005年	対象地域	モンゴル全土

協力プログラム総括票2

プログラム番号：0450070

III. 投入計画案

投入形態	案件名（新規又は実施中）	事業年度					
		H14 (2002)	H15 要請年度	H16 (2004)	H17 (2005)	H18 (2006)	協力額概算
技術協力プロジェクト	教育行政アドバイザー	2.9	17.1				20.0
技術協力プロジェクト	教育IT（教育分野ITリテラシー改善"Sakura"プロジェクト）	21.2	8.8				30.0
技術協力プロジェクト	基礎教育行政支援プロジェクト	13.5	23.2	23.2			60.0
	総計	37.6	49.2	23.2			110.0

※1　上段：概算（百万円）
　　下段：期間（黒：実施／グレー：予定）

※2　協力額概算は当該案件終了年度までの総額であり、2007年度以降継続する案件については、2006年度までの合計額と一致しない。

IV. 在外コメント

コメント

モ国における基礎教育（初等中等教育）分野については、90年の市場経済化移行から10年が経過し、混乱期への緊急リハビリ的な援助ニーズから将来への持続的成長を見据えた社会経済発展条件の整備へと当該国の援助ニーズも推移しつつある中で、その土台となる人材層に対する基礎教育内容を充実させることは同国の国家開発上極めて重要なことであり、現行政府においても教育分野への予算枠拡大等重点政策課題と位置付けられていることから鑑みると、モ国の、特に00年代において、基礎教育は重要なセクターであると思料されることから、地域的な遠隔性や対象層の絞り込みという協力実施上の障壁を乗り越えてでも、我が国が支援する意義の高い分野と思料される。

尚、本協力プログラムに盛り込んだ協力案は、我が国文部科学省専門家等による当任国の基礎教育分野の課題及び協力策検討提言や、先般（02年7月）に公表された国際教育協力懇談会最終報告のおいても日本の得意とする国際教育協力分野としてノウハウを蓄積してきた分野に合致している。但し、基礎教育分野においては他国の事例にもあるとおり息の長い協力が必要とされる為、市民レベルや学校単位の交流実績も踏まえながら、All JAPANでの支援体制構築が望まれる。

備　考（治安上の留意点等）

治安：年々殺人等の凶悪犯罪は増えつつあるも、海外における必要最低限の注意を払えば、特に問題なし。
医療事情：極めて劣悪。できる限り現地で医療行為を受けないよう健康面、事故等に十分な留意が必要。特に冬場の気温は零下３０度を下回り、寒い時期が年の半分を占めることから、ストレス等精神面でも留意が必要。

協力プログラム総括票1

I. 基本情報

国　名	モンゴル	プログラム番号	0450080
区　分	○新規　◉継続　○再要請	関連公信番号	
援助重点分野	基礎生活支援		
開発課題	学校施設		
協力プログラム名称	(和) 基礎教育施設改善プログラム (外)		

II. 概要

援助重点分野及び開発課題の概要等（協力プログラムの背景）

モ国の教育システムは社会主義時代に確立し、80年代には政府予算の約25％が割かれる重点ｾｸﾀｰとして、識字率97％という教育水準を達成するなど比較的安定していたが、市場経済化以降、教育予算の削減（15％まで低下）等を背景に、教育施設老朽化、教員待遇悪化など様々な問題が顕在化することとなった。これに対し、モ教育省は国際機関等の提言を受け、教育セクターにおける合理化、効率化を進めている。

これら施策は高等教育セクターで進学率増加が図られるなど一部改善も見られるが、引き続き厳しい教育予算状況から、独自での施設改修が困難な他、市場経済化後の都市への人口流入、地域間格差増大等の社会状況の変化への教育システムの対応（都市部学校適正配置、地方教員数確保、IT分野等市場経済化に即したカリキュラムづくり等）が課題となっており、国際社会からの支援が求められている。

協力プログラムの目的と各プロジェクト・個別案件の位置付け

＜協力プログラムの目的＞

初等教育分野において、市場経済化による社会体制の混乱により老朽化が進んでいる教育施設に係る改修・整備に係る協力支援を行うことにより、教育サービス供給に係る物的環境の整備に資すること

＜投入・活動計画＞

・個別専門家「教育行政」；学校施設配置計画に係る助言

・無償資金協力「初等教育施設整備計画」：

教育施設供給不足を緩和することにより、市場経済化移行に伴う都市人口流入増等の社会変動による教育分野への悪影響の低減に資する。（ウランバートル市首都圏対象）

・無償資金協力「第２次初等教育施設整備計画：

地方中核都市における教育施設の整備により、市場経済化移行に伴う教育分野への悪影響の低減に資する。（ダルハン市及びエルデネット市の地方中核都市対象）

・草の根無償・海外ボランティア；地方小学校建設プロジェクト（仮称）；

上記中核都市以外の地方における教育施設整備改修に係る協力モデル事業。（地方対象）

目標年次までに期待される具体的成果　※可能な限り数値化することが望ましい

首都圏（ウランバートル市）初等施設整備（2002年度中）

・地方中核都市（ﾀﾞﾙﾊﾝ市、ｴﾙﾃﾞﾈｯﾄ市）初等教育施設整備（2003年度中）

・地方教育施設改修計画モデル事業（2003年度中）

・他の地方教育施設改修（2004～5年度）

2010年までに地方を含む基礎教育施設の極度の老朽化状況が解消される

目標年次	2010年	対象地域	モンゴル全土

協力プログラム総括票2

プログラム番号：0450080

III. 投入計画案

投入形態	案件名（新規又は実施中）	事業年度					
		H14 (2002)	H15 要請年度	H16 (2004)	H17 (2005)	H18 (2006)	協力額概算
無償資金協力プロジェクト	第３次初等教育施設改善計画			154.4	154.4	154.4	463.2
14年度継続/無償資金協力	初等教育施設整備計画	2,340.0					2,340.0
無償資金協力プロジェクト	第２次初等教育施設改善計画	147.4	884.2	884.2	884.2		2,800.0
ボランティア	住民参加型地方学校建設プロジェクト	21.2	21.2	17.6			60.0
	総計	2,508.5	905.4	1,056.3	1,038.6	154.4	3,323.2

※1　上段：概算（百万円）
　　下段：期間（黒：実施／グレー：予定）

※2　協力額概算は当該案件終了年度までの総額であり、2007年度以降継続する案件については、2006年度までの合計額と一致しない。

IV. 在外コメント

コメント

モ国における基礎教育（初等中等教育）分野については、90年の市場経済化移行から10年が経過し、混乱期への緊急リハビリ的な援助ニーズから将来への持続的成長を見据えた社会経済発展条件の整備へと当該国の援助ニーズも推移しつつある中で、その土台となる人材層に対する基礎教育内容を充実させることは同国の国家開発上極めて重要なことであり、現行政府においても教育分野への予算枠拡大等重点政策課題と位置付けられていることから鑑みると、モ国の、特に00年代において、基礎教育は重要なセクターであると思料されることから、地域的な遠隔性や対象層の絞り込みという協力実施上の障壁を乗り越えてでも、我が国が支援する意義の高い分野と思料される。

尚、本協力プログラムは、共通する基礎教育分野の支援プログラムとして「基礎教育行政支援プログラム」と対をなすことにより相乗効果が期待しうるものであり、また、実施に際しては、特に地方展開において、協力隊チーム派遣がADB等にも参考となるような地方学校施設整備の標準（設計／実施体制含め）を提供することが鍵となることや、寒冷地でもあることから無償資金協力を含めた事業スキームの弾力的な運用が検討されることが望ましい。

備　考（治安上の留意点等）

治安：年々殺人等の凶悪犯罪は増えつつあるも、海外における必要最低限の注意を払えば、特に問題なし。
医療事情：極めて劣悪。できる限り現地で医療行為を受けないよう健康面、事故等に十分な留意が必要。特に冬場の気温は零下３０度を下回り、寒い時期が年の半分を占めることから、ストレス等精神面でも留意が必要。

技術指導団員報告

１・修復工事実施対象校の概要

平成１４年４月から選定された対象候補６校についての現地調査が行われた。その結果を踏まえ、施設修復の重要性、住民組織や住民参加意識成熟度等の調査結果が教育省へ報告され、以下の２校が選定された。その後住民参加型ワークショップ等を開催し、実施計画の策定を行い、平成１４年１０月修復工事が開始された。

a. 既設建物概要

	中央県エルデネサント校	ドルノゴビ県アイラグ校
延床面積・階数	約 1700 ㎡・　２階建	約 1500 ㎡・　平屋建
基礎	杭なし・コンクリート	杭なし・コンクリート
柱・壁	組積造　（煉瓦）	組積造　（煉瓦）
屋根構造・屋根仕上	ＰＣ版・アスフアルットシート	木造トラス・　平鉄板葺き
床	土事業・木根太　木板貼り	土事業・木根太　木板貼り
天井	PC 版下地・漆喰塗り	木下地・漆喰塗り
開口部（扉・窓）	木枠・木扉・・ガラス厚 3	木枠・木扉・ガラス厚 3
暖房設備	給湯方式・ボイラー建物内	給湯方式・ボイラー敷地外

b. 修復工事概要

	中央県エルデサント校	ドルノゴビ県アイラグ校
駆体・構造	既設使用・修復部無し	既設使用・修復部無し
床	約 80％撤去張替・破損部補修	約 20％撤去張替・破損部補修
屋根	防水シート全面撤去・新設	破損部張替
壁	外壁漆喰全面撤去　塗替	破損部補修
窓枠・障子	破損部補修・ガラス破損部入替	約 50％撤去新設・破損部補修
天井	破損部補修	破損部補修・
暖房	ボイラー新設・配管放熱器新設	引込管補修・破損部補修
予算・工期	約￥９００万　４ヶ月冬季除く	約￥６５０万　３ヶ月

2・修復工事実施計画

草の根無償金額の範囲内を前提に計画された修復工事のため、学校施設としての機能回復を主体としたものになっている。そのため、外観等の大きな変化は期待できない。又最初の工事であることと、予算面からの制約もあり、既設と同じ材料、仕様であり工法も従来の方法が採用されている。建築協力隊員（日本人建築技術者）が関与した形跡が具体的残らないのは少し残念だが、このプロジェクトの目的を考えればしかたがないことかもしれない。しかし着工前のプロジェクトのメンバーによる議論の積み重ねを経た設計図書・仕様書・施工計画書等の机上での検討書類が少し不足している点が気になった。

3・修復工事施工体制

アイラグ校はソムの住民主体、エルデネサント校は業者主体の体制で実施されている。これはそれぞれのソムが持つ建築工事に対する条件と修復工事内容により発生してきたものと考えられる。特にアイラグのソムが鉄道の拠点として発展してきたようで、住民の中に多くの職人が居住していた現実も大きく影響している。どちらも長所・短所があり今後のデーター集積には両方同時に実施出来たのは、目標の一つであるデーター集積のためにも、よかったのではないかと思われる。

4・修復工事に対する所見

リーダーを含むシニア隊員２名が赴任して１０ヶ月、一般建築隊員が赴任して３ヶ月で修復工事が開始されたが、多少の問題があってもここまでこられたことに、隊員とモンゴル事務所の関係者に敬意を表したい。シニア隊員がやってきた調査・ソムでの住民参加型のワークショップの開催・教育省と日本大使館との調整等で多くの苦労があったと想像される。

また、赴任直後の建築隊員が過酷な環境と語学のハンデキャップを乗り越えて必死になって取り組んでいる姿には感動させられた。建築分野の協力隊活動として始めての試みが多く含まれているこのプロジェクトは、多くの問題点が発生し、意見の相違があるのは避けられないと思われる。ぜひそれらを乗り越えて今回のプロジェクトが成功し、今後継続して実施されていくプロジェクトになるよう願っている。

面談／視察記録

日時	2002 年 11 月 19 日　16:00～16:30
場所	モンゴル教育文化科学省
出席者	教育省：Baatar ERDENESUREN, Deputy-Minister Begziav MUNKHBAATAR, Deputy Director of Public Administration and International Cooperation Department GANSUKH Purevjav, Assoc.Prof. Director, Economic-Monitoring and Evaluation Department JICA 事務所：麻野調整員 プロジェクト：磯野シニア、近藤シニア 調査団：伊藤団長、西村団員、三津間団員

協議概要

団長より、調査団の目的を説明した後、以下討議があった。

副大臣）本プロジェクトの活動や、草の根無償による改修工事について教育省は大変感謝しているが、来年度以降の資金源確保が課題である。

伊藤）草の根無償は配分金額も少なく、モンゴル全体の学校施設改善を草の根無償でまかなうのは困難である。JICA は技術協力を実施している機関であり、資金協力をすることはできない。本プロジェクトでは、他ドナーが資金協力しやすいような、学校建設のモデルを提示し、そのモデルの中に、今後教育省が活用していけるノウハウを提示して行きたいと考えている。そのためには教育省や CCU のプロジェクトへの主体的参加が重要となる。

副大臣）来年度も学校建設を継続していくこととなるか。

伊藤）今年度の 2 校の工事はモデル作りの良い事例であるが、住民参加のプロセスについては今後要検討である。建設工事の準備、計画、実施にも課題が多く、今後モンゴル側には、資金源の確保に尽力いただきたい。C/P の主体的参加についても協力願いたい。

副大臣）2 校の工事が終了した後、どのようにプロジェクトを進めていくかにつき検討していきたい。

以上

面談／視察記録

日時	2002 年 11 月 21 日　9:30～11:00
場所	アイラグソム役場
出席者	学校管理委員会（SMC）： ガルサンシェレン（ソム長） ジャルガル（アイラグ校校長） ランダルダワー（役所長、資材監査・暖房設備担当） ソドツムドルジ（モンゴル語文学教師） ブャンデレゲル（図書館管理者） アルタンゲレル（体育教師） ガントゥグトフ（アイラグ校教頭） シェレンドロゴル（会計） ナシャグドルジ（シャガンドゥルブルジ　バグ長） ガントメー（社会方策員） プロジェクト：磯野シニア、近藤シニア、中村隊員、仲西隊員 調査団：伊藤団長、西村団員、三津間団員

協議・視察概要

ソム長に表敬後、SMC メンバーとの打ち合わせを行った。

調査団）本プロジェクトによる協力前には、学校管理についての話し合いが行われていたか。

ソム長)住民による話し合いというものはなかった。

調査団）モンゴルでは、学校建設に関し誰がリーダーシップを取るのか。

ソム長）学校工事では、業者の指導のもと、住民が中心となって行い、役所がサポートする形である。

調査団）SMC が結成され、これまでと変わったところや、進捗について特に報告があれば教えてほしい。

SMC）

・業者 2 名、ソム住民 2 名が協力して工事に当たっており、良い工事ができている。（屋根工事担当）

・工事前に安全管理について住民に講習を行った。(安全管理担当)
・暖房に関して、学校独自のボイラーを設置する予定であったが、鉱山会社のボイラーから暖房をもらうように変更した。そのため配管の大きさの問題で鉱山会社側ともめたため、初めから学校独自のボイラーにしてもよかったのではないかと思う。(安全管理担当)
・工事の特徴は、①関係者が協力し合っている点②ソムが責任者である点③住民参加型である点である。将来的にも効果的なやり方であると思う。(換気設備担当)
・住民参加が特徴である。資材到着が遅れ、暖房工事が遅れているのが心配である。(役場長)
・ソム住民が、子供の学習環境の改善に熱心である。一週間以内に水道工事・電気工事が終了する予定である。(電気工事担当)
・賃金に関する住民の不満がある。80 万 Tg 前払いしているが、中間払いを求めてきている。業者社長がソムを訪問中のため、本件について話し合う予定である。(会計担当)
・工事の資材について、床板の乾燥が不十分なこと、配管の直径が細く、詰まりが懸念されることが問題である。学校は 20 年前に大きな改修をしており、今回の改修も、今後 20 年程度持たせたいと考えている。(校長)

調査団) SMC 内のミーティング及び SMC と業者とのミーティングはどのくらいの頻度で行っているか。
SMC)工事着工以降、SMC 内ミーティングは本日で 5 回目、業者とのミーティングは 2 回目である。SMC の各工事の責任者は毎日学校を訪問し、進捗をチェックしており、業者とも話し合いを行っている。ミーティングの際は、各分野の工事の進捗状況も情報共有している。
調査団) アイラグソムは建築関連の技術を持った人材が多いこともあり、工事がうまく進んでいると言えるが、もしそのような人材が少ないソムであると仮定した場合、隊員からどのようなアドバイスを必要とするか。
ソム長) 問題点を現場の人間に助言するなど、技術の足りない部分に対して協力がほしい。図面通り工事が進捗しているかについても助言がほしい。業者と話を進め、住民が参加しやすい体制作りを手伝ってほしい。
校長) SMC のメンバーにはある程度建築の知識があるが、さらに専門知識を指導してほしい。

磯野）床板の乾燥が不十分である問題などは、どうしたら起こらなかったと思うか。
校長）どのような資機材を購入するのか明確にし、各段階で立ち会っていればよかったと思う。

調査団）参加住民の組織体制はどのようになっているか。また彼らへのトレーニングはどのように行ったか。
校長）技術分野ごとに分け、4 名で 1 グループとしている。トレーニングは、各工事開始前に注意点等を連絡し、その後毎日工事の進捗を見ながら適宜助言している。

調査団）SMC のメンバーはどのように決定したか。
校長）ソム内の建築知識のある者や、経験者を募った。SMC のメンバーは全員がアイラグ校の卒業生であり、ほとんどが学校の教師と役場の職員である。

その他確認事項：
- SMC メンバーに対する報酬はなく、ボランティアベースである。
- 工事完了後も、維持管理のため SMC は存続していく予定である。
- 住民への報酬は教育省負担の中から捻出している。

以上

面談／視察記録

日時	2002 年 11 月 23 日　13:00～14:00
場所	エルデネサント学校
出席者	エルデネサントソム学校管理委員会（SMC）： ムンフバット（エルデネサント学校校長） ハルタルフー（エルデネサント学校水道職人・暖房工事担当） ハルフー（エルデネサント学校用務員・資材担当） チゥドゥル（歴史科教師・資材担当） バンザラグチ（電気職人・資材担当） ムンフバト（エルデネサント学校教頭・改修工事リーダー） ジデー（エルデネサント学校教頭・労務管理） デレブニャムブー（工作教師・窓修理担当） ソゥミャー（事務・経理監査担当） ヅェヅェグウルジー（医師・窓ガラス／ペンキ管理担当） オユンバト（水道職人・暖房工事担当） その他現地業者が同席。 プロジェクト：磯野シニア、近藤シニア、中村隊員 調査団：伊藤団長、西村団員、三津間団員

協議・視察概要：

（ソム長は不在。）

エルデネサント学校校長を表敬後、学校の教室内にて SMC 及び業者と打合せを行った。

調査団）SMC はどのように結成されたか。

校長）ソム全員による集会を開き、知識や経験がある者を募った。メンバーは生徒の父兄、ソム役場職員、学校教師が中心である。

調査団）これまで、学校改修について話し合う場はあったか。

校長）教師と父兄で構成された、学校教育について話し合う学校指導委員会はあるが、改修について話し合う場はなかった。

調査団）SMC メンバーの中に、エルデネサント学校の卒業生はいるか。また子供が本校に通っている人はいるか。
校長）2 名以外全員が卒業生である。また全員、子供が通っている。

調査団）工事における良い点と悪い点をそれぞれ教えてほしい。
SMC)

- 参加住民達と良い関係が築けている。資材が予定通り届いたので工事がうまく進んでいる。冬季は寒さのため工事がやりにくい。(水道工事担当)
- 夜 10 時、11 時頃まで残業が続き、職人が疲れている。資材として届いたガラスに破損があり、不足した部分があった。（窓・ドア工事担当）
- 卒業生の住民参加により、心から良いものを作ろうという気持ちを皆が持っている。冬季は寒さが大変である。見積書の内容よりも資材が不足し、ガラスなどは数を増やした。（校長）
- 窓工事の人などは寒い中工事が大変である。（労務担当）
- 学校の改修ができ、皆が喜んでいる。暖かい季節のうちに工事ができていればさらによかった。（役場）
- 子供が 3 人いるが皆喜んでおり、日本の協力に感謝したい。業者と良い関係が築けている。今後、メンテナンスもしっかりやって行きたい。水道工事の技術面でいろいろ心配な点がある。（水道管理）
- 住民参加の良い点は、地元の人が、技術がなくても学校を良くしたいという気持ちがあること、仕事が本人の良い経験になるという点だと思う。（業者）
- 予定通り水道工事も進み、300 名の生徒が暖かい環境で授業が受けられるようになった。（水道工事担当）
- 草の根の遅れにより開始が遅れた。悪条件の中皆がんばっている。（中村）
- 積極的に活動している 2 名の日本人に感謝する。（業者）
- 近藤シニアの任期を、最低でも工事が終わるまで延長してもらいたいと考えている。本件については、JICA へ正式レターを提出した。(校長)

調査団）SMC 内でどのくらいの頻度で話し合いをしているか。
SMC)工事開始前に、担当分野ごとにミーティングをした。普段は 1～2 週間に一度、担当分野ごとに集まっている。

調査団）アイラグでは、予定段階と実際の工事で内容の乖離があったが、ここではどうか。
SMC)そのようなことはない。

調査団）工事への参加者はどのように選定したか。
校長）ソムのラジオ・TV 放送を使って募集した。またアンケートを配布したところ、60～70 名から回答があり、それをもとに専門の知識・経験のある者を選んだ。
調査団）その方法は、隊員の指示によるものか。
SMC)SMC で相談し、主体的に決めた。今回は「住民参加」に留意し、ソム全体に伝わるようにした。学校の父兄からの補助も得られた。

調査団）12 月以降の工事中断期間の SMC の活動として、何があるか。
校長）これから業者と相談するが、ドア及び床工事を継続してやってはどうかと考えている。

磯野）全体的にいい仕事ができている。冬の工事中断期間に再度体制を立て直し、残りの工事（屋根・電気配線・内装・外壁等）にも尽力してほしい。今回の工事だけでなく、学習環境の整備のため、日常の校舎の維持管理も SMC が進めていく体制としてほしい。春の工事再開に向け、スケジュールを組み、適宜隊員に相談しながら進めてほしい。

以上

12997